

吉田金彦

あわせ

ひやかす

おかげさま

にくい

ものをいう

創拓社

かす

のみこむ

ふだん語小辞典

はしやぐ

ことばのカルテ

ありがとう

ふだん語小辞典

ことばのカルテ

吉田金彦

創拓社

学院図書館
書章

吉田金彦 よしだ・かねひこ

一九二三年、香川県に生まれる。

京都大学国文科卒業。

大阪外国大学教授などを経て、現在は
姫路獨協大学教授。国語学者。日本語
語源研究会代表。

主要著書——『現代語助動詞の史的研
究』『古代日本語をあるく』『古代日本
語をさぐる』『日本語語源学の方法』
など。

©Kanehiko Yoshida

ふだん語小辞典 ことばのカルテ

一九九〇年七月一日 第一刷発行

著者 吉田 金彦

発行者 井吹 晉

発行所 株式会社創拓社

東京都千代田区神田神保町二一三八
稲岡九段ビル六階 〒一〇一

TEL 〇三・二八八・七一〇〇
FAX 〇三・二八八・七一六四

振替 東京七―五八五五〇

印刷・製本 図書印刷株式会社

本文用紙 三菱製紙株式会社

万一落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします。

ISBN4-87138-101-3 C0095

1990,printed in Japan

はしがき

ことばが萌え、ことばの花が咲く。

さまざまの綾^{あや}なすことば。人と暮しの中に咲き出る嬉しいことば、悲しいことば。なくてはならぬ生活のことば、人生の蔭^{かげ}りになる暗いことば。もし良いことばやよくないことばがあるとしたら、よくないことばになっていった訳^{わけ}があるだろう。

ことばが“人の心の花”ならば、よくないことばの花は咲かせたくない。救いのある美しいことば、和やかな正しいことばで、この国土に“心の花”を咲かせることができたら、どんなにすばらしいことか。

みんなが使っているみんなのことば。ふだん着の日本語に今一度、目を向けてみる。空気や水の存在のように、綺麗で沢山あることが当り前であることの重要さを忘れかけている。日常何気なく使っていることばをぞんざいにしたり、悪用したりしてはいないだろうか。人が傷つくのも、人が慰められるのも、ことばである。よく使う日常語の意味が、もともとどんな意味と昔を持つのか、ありふれたことばの正体を知っておくこ

とも大事である。知っていれば愛情もわく。

ふだん着の日本語こそ、もっと自覚しておきたい。

私はかつて、この本の始めに次のように書いた。

これは私の見たふだん語の診断書である。ことばを診察していると、人間と同様にそれぞれ個性と表情とがある。そしてその健康状態は、今の社会的環境に左右されていたり、遠い遠いことばの誕生や、成長の歴史的背景に、深く根ざしていることを知る。それらの事実を知って驚き、驚いては強い愛情を感じる。ことばが親、兄弟で大家族をなしているもの、そうでないもの、孤児のようにみえているが先祖の古いもの、そのたどれないもの、いろいろである。顔や衣装が違うために、同じことばでも他人のように見えたり、また反対に、アカの他人だけれど同じ形をしていて、他人のそら似のようなことばもある。まことにことばの研究は厄介である。そのことばにはどんな仲間がいるか、近所づきあいはいどんなかを調べてみると、生きていることばの感情や好みといったものまでわかる。副詞の構成や敬語の問題はそのよい例であろう。

国語学者は、子供の健康を見守るような気持ちで、ひとつひとつ、ことばの面倒を見てやらなければならない、と私は思う。生きていることばは傷つきやすい。法規でしば

るように、単にことばを統制してみたところで、それだけで整理できるものではない。母親が子に向かうように、医師が患者に対するように、まず何よりも、じつとことばを見守り、正確なカルテを書く必要があるのだ……。

以上のようなことを書いてから、二十年経った。が今、毫もその気持ちは変わらない。また掘り起したふだん語の診断についても、不充分なところはたくさんあるが、少なくとも大きな誤診はしていなかった。最初、三省堂新書として出して頂いた昭和四二年のころは、今日のようなサイケ調の風俗誌やケバケバしい劇画誌のなかった時代で、一コマコマにマンガを添えた新書版ということが珍しかった。出した当初、私の学生時代のE主任教授から、処女出版にマンガ新書を出すのはふざけている、とばかり陰口を叩かれたものだ。それでも結構、入社や入学の試験問題に使われたり、結婚式の贈り物や銀行の社員教育に使われたこともあったようで、昭和五二年には再び三省堂選書に加えられる、新版を重ねた。マンガ付きでも、地味な本だったのである。

今回三たび、創拓社のお声がかかりで、大先輩たちの名著復刊と並べ、出して頂けることになったのは、日本語と多くの人びとのためにもありがたいことである。同社にあつくお礼申しあげる。今度はもうマンガは抜いて、後の方の一部に新聞等にした文章を

加えることとした。末尾に出典を示した文章がそれである。人生の晩年近くなって、血気にはやった昔のスタイルをお目にかけるのは、面映い思いもするが、そのヤボ臭さが、またその時代のことばでもあるのだと思い、あえて訂正加筆はしないことにした。

だからここには、まだ「新人類」やアラレ語などの流行語は出ておらず、ワープロもバイオテクノロジーも「衛星放送」もなかった時代に書かれたものである。BGがOLになり、それからキャリアウーマンを経てオフィスウーマン(OW)まで変化し、「主婦」という語が「専業主婦」「主夫」などと特別に使われるのを契機に廃れた。「昭和元禄」(昭和43年ころ)から日本の「高度成長」に伴う「経済摩擦」が高まり、「政治倫理」や「政治改革」を政治家自身口にするようになったのも「金脈」・「金権」(昭和49年ころ)からである。「恍惚」・「同棲」(昭和47年ころ)が耳に残ったことばだったが、オバタリアン・セクハラは平成に入ってからである。昔からあった「五月病」が広がってスチュウデントアパシーと呼ばれるようになったのも、教育論議が盛んでも入試改革がそれに伴っていない現われと併行している。

イヤリング好きの土井たか子さんの颯爽たる姿に、「熟女」やマドンナを考えたがる。「ロッキード事件」(昭和51年)から十年経つと、今度登場したのは「リクルート疑惑」(昭

和63年)だった。

ちょっと振り返ってみても、こんな世相語がいっぱいだ。

人が行き交い、ことばが地球をかけ回る。

若い人、ジャーナリズム、政界・経済界のことばが新語・流行語として起こり目まぐるしく広まり、走ってゆく。どんな風俗語が生まれ、どんな世相語が造られるか。この国のことばのスピードは早い。取り残された時代語、忘れられようとしている文化語も少なくない中であって、今一度、自然なことば、やさしい日本語を眺めたい。

自然の土手に咲くスミレや、野に咲くレンゲの花をいくつかしむように、ふだん着の日本語を大切に見つめたい。自然の大地に立って、足許の日本語をやさしく見守りたい。

美しい日本語、正しい日本語を守るために！

そしてさらに、

世界の人から愛される日本語となるために！

平成二年四月十五日

吉田金彦

ふだん語小辞典 ことばのカルテ・目次

I あいさつことば

こんにちは・もしもし・すみません・ごめんください・おありがとうございます・おかげさま・いらっしゃる・こうつと・おはようございます・させていただきます・ございませう・おめでとう・くれぐれも・さよなら

9

II 対話するところ

あう・たたかう・いこう・ものをいう・しあわせ・あいす・いきなり・ゆっくり・かごの鳥・お山の大将・くせに・ちょうだい・ことば・しゃべる

45

III 古語は生きていた

けりがつく・あられもない・あこがれ・あどけない・ちゃった・りゃんせ・でかんしょ・おいでまいよ・ゆかずか・たべる・みえる・おしゃれ・いかす・せかせか

81

IV 語源を考え直そう

117

けち・なしのつぶて・てんでこまい・ねこなでごえ・とどのつまり・ぼうにふる・
おすなおすな・ひなたぼっこ・お茶をにごす・うどの大木・百年め・さくら・だいなし・
おもう・でかい・のみこむ・ちゃかす・ひやかす・かつぐ・ゆびきり・あぶらをうる・
お茶のこさいさい・ながし・でたらめ・みやげ・むら八ぶ・みずかけろん・おちゃつびい・
へそくり・「見る」と「見える」・鶏が先・ホコラ・ことばの品性・かがし・ホコとヤマ・
烏相撲・イハレ・ホダリ・カタオチ・天の香具山の「カグ」

V ふだん語のひみつ

でない・である・です・だ・やがる・おっこちる・がんばる・しかたがある・ひまがいる・
なんぼ・やれやれ・ぬけぬけ・くさい・にくい・こいしい・つまらない・たまらない・
あたらしい・とんでもない・とても・おふくろ・おやじ・ひとりぼっち・ほとけ・
はなもあらしも・きっかけ・きのどく・やきもち・みそ・ホヤホヤ・ナマとタチ・なもし・
はしゃぐ・こんこ・はやけんど・ありがとう

VI 日本語スケッチ

ことばの索引

装帧／渡辺千尋

I
あいさつことば

こんにちは

こんにちは、皆さん。今日から身の回りのことばについてお話をしましょう……と、ついペンが走りそうなところ。コンニチハが日本の代表的な挨拶あいさつことばであることは言うまでもないが、今や話しことばだけではなくて、手紙の書き出しでもコンニチハが使われるようになった。そういえば、今まで使い慣れてきた「拝啓」は堅苦しく古い感じ、で、親しい友達にはとても使う気になれないのが実情、話すように書くということ、いつしか「拝啓」は忘れられ、手紙は「帽子無し」の文章が多くなった。そこにコンニチハが登場したのもむりはない。ついさきごろ、ジャーナリズムで「拝啓誰々殿」というのが流行語となったことがあったが、それはもう「拝啓」ということばが、現代に物珍しくなった反射作用の現れであり、そしてまた当世に「拝啓誰々」と古めかしく言わなければ、聞き届けてもらえないという皮肉とユーモアもこもっていたようだ。

寿岳章子じゅがくあきこ氏も言われるように、コンニチハは確かにラクチンな挨拶ことばである。昭和四十五年の日本万国博のテーマソングも「こんにちは、こんにちは」の繰り返しだ。

梓^{あずさ}みちよ歌手の「こんにちは赤ちゃん」が中村八大氏のメロディーで全国にばらまかれたこともあった。コンニチハは、まだまだこれから幅をきかして愛用されることばである。

ところが日本に來た外国人は、サヨナラやドウモやアリガトウはいち早く覚えるが、コンニチハはそれほど知られない。外人に接する時に、日本人が堅くなつてあまりコンニチハを使わないためだろうか。とすると、日本人は見知らぬ人にはコンニチハがまだ使えないのであつて、コンニチハが使えるのはほんとうは限られているのかもしれない。日本人は挨拶好きで長談義だとよく言われる。確かに過去の人々は、儀式や訓示が好きで、そういった時は長くて紋^{もん}切り型の挨拶がよくあつたものだ。そういう長挨拶は今ではきらわれる。

誰にでもさりげなく呼びかけられるコンニチハ、そこには胸をあけた活気とさわやかさがある。よりよい人間関係のために、気楽にコンニチハを交わしたいという意見があるのはもつともなこと。しかし、相撲^{すもう}界の隠語でコンニチハ相撲というのがある。これは、やおちよう相撲のことで、右とは別物だからただけでない。

コンニチハはいつごろから使われたろうか。能狂言などでは「今日はよい天気でござ

る」というふうに使われ、コンニッタと発音されていた。江戸時代の『江戸愚俗徒然つれづれ噺ばなし』という本に、木戸の男が「さて、こんにつた、わざわざ参上と申す子細しさいは、え、もし旦那だんな」と使っている。親しくなるほどことばも崩くずれて、コンチワーからコンチャーとなり、はてはチャーだけでやって来る御用聞きがある。こうなればことばというよりは符牒ふちようのようなものだ。

もしもし

昔、ある所にひとりの目の不自由な人がいた。もうそろそろ家庭を持たなければならぬのに、まだ適当な妻が見つからない。方々を尋ねてみても、こちらが気に入れば向こうがいやだと言うし、向こうから押しかけてくるのはどうしても好きになれない。そこで清水の観音様かんのんにお願がんをかけて、ぜひ良縁を恵んでいただこうと、お堂に籠こもることにした。ところが同じ観音堂に何やらお祈りして籠こもっているひとりの女性がいる。聞けば自

分と同じく目の不自由な人で、話すうちに心が合い、酒を飲むやら平家を物語るやら、しまいいにはいい気分になってふたりとも眠ってしまった。さてふたりのそれぞれの夢の中に、清水の観音様が現れ、「この西門の所におまえさんの良縁となるべき相手がいる」と教えられ、別々にふたりは西門に行き、目の不自由な人同志がそこでめでたく結ばれた——という話が能狂言『清水座頭』にある。このように妻を得たいと神仏にお祈りするのを室町時代では「申し妻」という。モウシと観音様にお願ひするのである。今でも神社に参拝すると、神官が祝詞をあげる前にモウシを長く引つ張って唱える。その声があまりにも大きくしかも長いので、オウーとまるで怪獣が唸うなっているように聞こえ、子どものころにそれがおかしくてたまらなかった記憶がある。神様を呼び出し、お願いごとを申し上げるのだとは教えられていたが、このオウーが二、三分も続く間、じっと頭を下げているのに退屈して、こそこそといったずらなどし、あとで父親に叱しかられたものだった。

このようにモウシは神仏にお祈りしお願いごとをする時に言うことばである。今日は「モシモシ吉田さんですか」というように、人間同志のしかも呼びかけだけに使われたり、童謡「モシモシ亀よ亀さんよ」のように生き物にも使われたりするが、昔は神仏や

身分の高い人に向かってだけ使われたもの。尊敬しなければならぬ相手に対して、こちらが謙遜した気持ちで言うことばである。モウスはこのように偉い人に物を言い始める時に使うが、またおしまいにも使う。例えば、『二人座頭』で例を出すと、「先づ案内を乞はう。ものも。案内も、う」「いや表にもの申すとある。案内とは誰そ」「ものも、う」「どなたでござる」「私でござる」というふうには、コンニチハの代わりに室町時代はモノモウと言っていた。そして呼びかける時にも「しし、もうしもうし」と言い、話がつんで帰る時には「お暇も、うします」と言ったのである。このように訪問から帰り際までモウスを使ったのだが、モウスは一つの文でも始めと終わりに使われる。始めはモシモシのモシで、終わりは「とかく世界は思ふ様にやあならないもんだアも、し」（『東海道中膝栗毛』）などのモシだ。上に助詞のついたナモシは松山方言として『坊ちゃん』で有名になったが、この変形は全国的に多く、藤原与一博士のご調査に詳しい。それは江戸時代からで「新さんハア行くべいむし」（『甲斐夜の錦』）などでもわかる。